

遊草の二人——潤一郎と勇

遊草の二人

潤一郎と勇

真下五一

學藝書林

著者／真下五一（ましも ごいち）

略歴／明治 39 年 5 月 5 日，京都市生れ。明治大学商学部卒。日本文芸家協会，日本ペンクラブ会員。京都市文化功労者。京都市文化団体懇話会初代会長，現相談役。

著書／『啄木その愛と死』『正岡子規』『虚子』『新島襄』『京都物語』『京都の人』『京の墓』ほか 50 数冊。現在「日刊工業新聞」に『人間夏目漱石』を連載中。

住所／京都市左京区一乗寺庵殿町 19

遊草の二人——潤一郎と勇——

定価 一二〇〇円

著者 真下五一

発行日 昭和五十二年四月十五日 ©

発行者 武田季男

発行所 株式会社 學藝書林

東京都中央区八丁堀二二三一五

電話 五五二五九〇六（代）

振替 東京三二一〇八二二

印刷・製本 東洋印刷株式会社

0093-01705-1000 落丁・乱丁はお取替えます

遊草の二人——潤一郎と勇

遊草の二人 ■ 目次

第一章	美人妻の二人	セ
第二章	奇妙な縁	三
第三章	落魄の旅から	五
第四章	劇中劇	二一
第五章	かにかくに	二四
第六章	友禅の玉だれ	二九
第七章	夢と寂と	二〇九

第一章

美人妻の二人

暦の上ではもう夏に入って九日目だったが、午前中の雨があがると、急にうそ寒いほどだった。

「単衣ひとえを用意しといたんですけど、袷あわせにしゃはりまっか。それに広い御所はスソとして、いっそう寒いかもしれまへんわね……。どうしまひょ？」

「そうだな。寒いのは暑い目の方が無難かな」

「そんなら、そういたしまひよ。結城ゆうきの紺紵ひろうに平紵のお羽織は鉄色がよろしおっしゃろね」

「紋付はいけないということだから、まアそれでいいだろう。でも袴はかまは夏袴にしようか」

「ほんなら、お食事より先に、そちらの用意の方をすませておきますさかい。

……」

松子は言いつつ、もうせわしそうに次の間に立っていった。

紋付もいけないが、洋服の場合でも背広にするようにと、あらかじめ宮内庁

から通知を受けていたのは、偶然の拝謁（はいえつ）という形をとるためらしく、公式に陛下の前に出るというのではないからだ。

でも初めてのことであってみれば緊張の度に変わりはなく、さすがにその直前の昼食はあわただしい思いの谷崎潤一郎であった。

「川田順先生のお宅に一度みなさまおそろいになってから御一緒なさるのでっしゃろ。運転手にはとりあえず川田邸までと申しつけときましたわよ」

「う、そうだな、扇子はどうしたものかな」

「まア、そんなにお急ぎにならはいでも、北白川までのことですし、お時間は十分ございますわよ。もう一つ軽う、おぶづけをなさいますては。……」

「いや、もうよろしい。またすぐ何か頂くことになるだろうしね」

「そんなら、おぶうだけお入れしますわ……それよりどうでっしゃろ。川田先生はきつとお洋服で、吉井勇先生はお羽織お袴と思いますけれど、新村出先生はどちらでっしゃろ」

「そういえば、これは判じものみたいに五分五分だね」

「わたくしは、多分お洋服になさるのやないかと思うのですけど。……」

「僕は新村博士も和服と思うがね」

「そうでっしやるか」

「そうだよ。賭け^かをしてもいいよ」

「はい。ほんなら敗けた方が何んでも一つ無理をきき入れるということでしょう。……」

「よし、よし」

それで潤一郎の緊張もだいぶんやわらいできたようだった。松子のそれとなしに気を配った心にくいまでのリードぶりだった。その良きリードによって今はどうにか夫らしい口ぶりになってはいるが、結婚当時はまだ恋妻松子に敬語を続けていた潤一郎だった。松子の方はまた京都に住んで大阪弁と京ことばの間^{あひだ}の子だった。

「ほんなら賭けを楽しみにお待ちしますわ。もう直ぐ川田先生のお宅で勝負がつきますわね。ほしてわたくしのおねだりは御一緒の旅行ですえ。覚悟をきめといとくなはれや。どこにするかはゆっくり考えときますさかい。……」

「そのかわり僕が勝った場合はこわいぞ。三晩つづけて噛^かみついてやるからな。……」

「あら！」

潤一郎のその『噛みつく』という意味がわかりすぎている松子だけに、何とも真昼の太陽の中では、妻ながらも顔の赤らむ恥ずかしさだった。事實はつとその面が朱に染まった。

と、潤一郎の眼にはそれがとても新鮮で美しかったのである。と思うとあつという間に松子に寄りかかっていた。今までにもこういうとさの行動に出ることは幾度かありはしたけれども、今は羽織袴に威儀を正しての上のことであつた。

さすがの松子もびっくりして思わず身を退いた程だが、しばらくは声も出ず、「まアあなた！　せっかくの着付けがさっぱりですがな……あ、お顔にも紅が……ちよつと待つとくなはれ。おしほり持ってきますさかい。……」

と、ようやく口がきけたのは、一度潤一郎と共に座ぶとんの上で転げたあと、何とか潤一郎を押しやうて起き上がれてからのことであつた。

「……ねえやが何時はいつてくるかしれしまへんやおへんかいな。……」

それでも松子の顔は、あわててこそいても決して怒ってなぞいないのだった。そして自分の着物の乱れを急いでかき合わすと、すぐ濡れタオルを取りに立つていった。

それで潤一郎も夢からさめたように体を起こすと、自ら羽織をずり上げ、袴のしわをたたき直しにかかった。

「はい、はい、これでお顔を拭いとくれやす。今度こそ急いでいただかんともう時間もおへんのですえ。……」

言いつつ、後から背中をたたくようにして玄関へ押し出したのだった。

○

吉井勇は洛南八幡の小高い宝青庵の一室にあって悠々と自著の『京洛遊草』を繙ひもといていた。まだ出版元の高桐書院から届けられたばかりの歌集であった。

他にもう一冊、これも今月に入ってから出た『短歌風土記・山城の一卷』も机上にそろえてあった。孝子が傍にいるようになってから、仕事の方は非常に好調だったからである。

その孝子がこまごまと世話をやいて、大きな図体の勇に着付をしてやる。

「それにしてもおかしい天候だな。寒いのは己だけでなく、谷崎君も川田君も新村さんも慌わづてているだろうよ。きつとみな袷あじだ、そら合服だといってね。……」

「そうでしょうね。でも、市内とこちらとどちらが寒いでしょうか」

「同じようなものではないのかな。ここは市内より南よりだけでも、また見晴

しがよいだけに位置が高くて、それだけ空気も澄んでいるからね」

勇が疎開先の富山県八尾町からようやく京都府下に帰ることの出来たのは終戦の二十年の十月のことだった。それでも元住んでいた岡崎田勝寺町の家どころか、市内に戻ることはゆるされなかったので、とにかくと落着いたのが綴喜郡八幡町のこの寺だったのだが、すでにあれからもう二年近くたっていた。

月夜田というその町はずれの字名がよく示しているように、月の夜などは遠く鷲峯山のあたりまで、へだてる物のない一面の山城平野が、まるで大海のように月光の下に浮き出て美しい。

八畳と六畳の二間だけの借間生活だが、孝子夫人との二人暮らしには、ちょうどころあいで、少々の不便さえ辛抱すれば、さすがに元禄時代の建物を男山八幡からそっくりそのまま移してきたといわれるものだけに、どっしりとしていて、勇にはすっかり気に入っていた。

「他の皆さまはお近くですからよろしいけれど、あなたは少しお早目にお出かけになりませんかといけませんわね。お待ち合せ場所の川田先生はよく御存知なのですか」

「うん、一度行ったことがあるからね。それより谷崎君とは、ちょっと久しぶ

りだな」

「谷崎先生との最初のお出会いのことはあたしも知っていますよ。東京の府立一中時代のことでしょ」

「いや、己は当時ただぼんやりとそんな秀才がいたことは記憶しているけれども、谷崎君は覚えてないと言っていたね。一時は同級生でもあったんだが、己は落第し、谷崎君は逆に一級飛び越して上がってきたんだからね。……」

「それで同級生になられたわけですか。ああ、そういえばあなたが海軍の軍人志望にかえて急に転校されたとかいう、その少し前のことですね。いつかそんな風に承ったことありましたわね」

「だが本当に二人が会ったといえるのは、新詩社に入って与謝野寛先生の門下になってからのことだね。私より少しおくれてはいつてきた恒川陽一郎君の家で一高の有志が短歌の会を開いた時のことだ。新詩社側からは与謝野先生と北原白秋君と……」

「啄木さんと……」

「いや、石川君は来ずに、己との三人が招かれたんだが、一高側から七、八人も集まっていた中の一人に谷崎君がいたわけだ。真紅のリボン（リボン）を羽織の紐（紐）なん

かにしてね。ビールも相当飲んで、なかなかおしゃべりも達者なほうだったな、そのころは」

「それで、あなたの方は如何でしたの」

「それが、谷崎君に聞くところによると、当時の己はニキビだらけの顔して、やはりにやにやしていたそうだ」

「まァ、にやにやなんて。そういえば、あたしもあなたの笑顔よりは認めますけれども、だってにやにやではないわ。そうね、どういったらいいかしら……そう、にんまりがいいわ。あなたの笑顔は、このにんまりの方ですよ」

「そうかな。すると己の笑顔も少しは値打ちが上がったみたいだな」

「そうですよ。そのにんまり笑顔で、今日も天皇陛下の御前にお出ましになつて下さいよ。……」

「いや、己はもう陛下にまみえる光栄の前に、奥さんから受けた光栄で一杯だよ」

「まァ！」

孝子は子供のように眼をむいてみせて、そして勇の二の腕のあたりをキリッとつねった。